2024年4月21日（日）主日朝礼拝説教

『何も取れない夜』井上隆晶牧師
ヘブライ11章1〜3、6節、ヨハネによる福音書21章1〜14節

❶【キリストが現れる】

1節に「**その後、イエスはティベリアス湖畔で、また弟子たちにご自身を現わされた。**」とあります。この「**現わされた**」という言葉は、ヨハネが好んで用いる言葉で、ギリシャ語で「ファネロー」といい、英語では「appeared（アピアー）」です。この世の宗教は、人間の方から神を見つけようとする下から上への運動ですが、キリスト教は神の方から人間にご自身を現してくださるという、上から下への運動です。これを「**啓示**」といいます。カルト宗教である統一協会などは、「神がこの世界を創造されたのだから、神の性格がこの世界に現れている。この世界を観察すれば神が分かる。この世界を観察するとすべて二つの性に分かれる。だから神は男性と女性の中和的存在だ。」と神を断定しました。蟻が太陽を観察してそのすべてが分かると思いますか？蟻の目に入るわずかな光の量と熱しか蟻には分からないのです。それをはるかに超えるのが太陽です。神も同じです。私たちに分かる神の部分はごく一部であって、神は私たちに耐えられる姿でご自身を現わし、私たちの益となるように調節してご自身を現わして下さいます。復活したキリストに出会った弟子たちを見るとイエスだとすぐには分かりません。**現れたキリスト、それを何度も体験することで、人はだんだんと復活したキリストが見えてくるのです。**復活したキリストが人々に現れる出来事は、言ってみれば「天が地に現れ、未来が現在に現れるような出来事」です。よみがえったイエス様は地に属すると同時に天に属し、現在の存在であると同時に未来の存在でもあるのです。神キリストはご自分を愛さない者には現れませんが、愛する者たちにご自分を現して下さいます。

❷【何も取れない夜を経験して】

ペトロが「**私は漁に行く**」と言うと、他の六人の弟子たちも「**私たちも一緒に行こう**」と言って、舟に乗り込みました。しかしその夜は何も捕れませんでした。夜が明けたころ、イエス様は岸に立っていました。偶然立っておられたのではありません。弟子たちの何も取れない漁を一晩中見ておられたのかもしれません。かつてペトロは、このガリラヤ湖で「**人間を取る漁師にしよう**」（マルコ1：18）と言われキリストの使徒となりました。でも、いくら伝道しても信じる人が起きて来ない、一生懸命働いたのになんの収穫もない、そういう時があるのです。疲れて、笑われて無一物で帰って行かなければならない時があるのです。イエス様は彼らに声をかけます。「**子たちよ、何か食べるものはあるか。**」弟子たちは答えます。「**ありません**」イエス様はいいます。「**舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば取れるはずだ。**」（5〜6節）そこで網を打ってみると、引き上げる事ができな

いくらいの多くの魚が取れました。153 匹だったといいます。４世紀のヒエロニムスは、これは地中海の全ての魚の種類であり、あらゆる人が救われるという意味だと解釈しました。またある学者は「舟の右側とは異邦人を意味する」とも解釈しました。この世が湖なら、岸辺とは天国を象徴しているように思われます。イエス様は天国の岸辺で私たちを見ておられ、待っていてくださいます。

●榎本保郎牧師の話を思い出しました。彼が神学生の時、ある田舎の教会に派遣されました。そこの牧師は路傍伝道に行こうと言って彼を誘いました。榎本神学生は、牧師が立つための木のミカン箱を持ってついて行きました。辻に立ち、牧師は箱の上に立って話をしますが、誰も立ち止まって聞く人はいませんでした。ふと一人の少年が近づいてきて「アーメン、そうめん、冷そうめん」（日本人がキリスト教徒を馬鹿にする時のことば）と言って榎本神学生を馬鹿にしました。恥ずかしいやら、腹が立つやらで悔しい思いをして教会に帰ると、牧師は感謝の祈りをしようと言います。榎本神学生は「何が感謝だ。これだからキリスト教は馬鹿にされるんだ」と腹が立って祈らなかったそうです。何年かが過ぎ、榎本牧師の教会に一人の神学生が派遣されて来ました。彼は榎本先生を見るなり「先生、僕を覚えていますか？昔、路傍伝道をしていた先生にアーメン、そうめんと言ってバカにした少年です。」と言われたそうです。榎本牧師は神様のなさることを驚き、涙を流して悔い改めたそうです。

私たちはこの世でずっと祈ってきました。信仰を辞めてしまった人のこと、家族や子供たちのこと、音信が不通になった人のこと、暴言を浴びせ去って行った人のこと、こんな教会は何もしてくれなかったと言って去って行った人のこと、都島教会が成長する事を 34 年間祈ってきました。それらすべてが無駄だったのかと思う時があります。しかし、いつかイエス様のおられる天国に行ったら、すべてが無駄ではなく、大いなる収穫があるのをこの目で見せていただく時が来るかもしれません。

❸【主を知るために伝道も信仰生活もある】

弟子たちが「**陸に上がってみると、炭火がおこしてあった。その上に魚がのせてあり、パンもあった。**」（9 節）とあります。既に陸にはパンも焼いた魚も用意してありました。では何のために苦労して漁をさせたのでしょう。私たちは何のために伝道をするのでしょう。それは信徒を増やす為ではなく「神を知るため」です。旧約聖書の中に繰り返し出てくる言葉に「**～をして栄光を現わす時、あなたがたは私が主であることを知るようになる。**」とあります。ここでも弟子たちは「あなたはどなたですか」と問うことなく「**主であることを知っていた**」（12 節）とあります。「**主を知る**」ために、すべての地上での伝道や信仰生活があるのです。

❹【キリストと共に朝食を取る】

イエス様は「**さあ、来て、朝の食事をしなさい**」（12 節）と言われます。「**イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた。**」（13 節）

とあります。**この岸辺での食事は、天国での食卓を連想させます。**面白いことに、聖書は善悪知識の木の実を食べる堕落物語で始まり、イエス様の手からいただくパンを食べる物語で終わっています。一番、食事を一緒にするのは「家族」です。キリスト教だけが、礼拝の中で共に食事（聖餐）をします。人は神の家族であり、人と神は共に生きる者であることを教えているのです。

●ヘンリ・ナウエンがこんなことを書いています。
ずっと私は永遠のいのちを、「死後のいのち」として語ってきました。しかし年を取るにつれて、「死後のいのち」への関心は少なくなりました。…もし私のゴールが永遠のいのちであるとはっきりしているなら、そのいのちは、たった今、私のいるところで得られるものでなければなりません。なぜなら永遠のいのちとは、神の内におり、神と共にあるいのちだからです。…もし私たちが、神との親しい交わりの内に生き、神の家族の一員となっているなら、もはや「まえ」とか「のち」とかいうものはありません。死はもはや、他と区別する境界線ではありません。死は、神に属する者を支配する力を失いました。神は生きている者の神であり、死んだ者の神ではないからです。

私たちは神の家族なのです。キリストの家族なのです。神の元には死んだ人が行くと思っているかもしれませんが、違います。神の元には死は存在しません。神の家族の中には命しかありません。彼らは生きています。**永遠の命は人間が自然に持っている力ではありません。神によって与えられなければ、人は永遠に生きることは出来ないのです。永遠に生きている方に結ばれるので、私たちは永遠に生きるのです。永遠の愛に愛されるので、私たちは存在し続けるのです。愛されるのはこの世からです。だから私たちは死なないのです。**それを感謝して生きて行きましょう。